

■この本を読むあなたへ

この本は、4つの章で構成しています。

1 夢の中で走っています！ 松本誠司

脳性マヒの障害をもって生まれた松本さんが成長とともに障害を受け入れながら、社会の矛盾に出会い、全障研をはじめとする障害者運動に出会ってきたあゆみをつづっています。

2 死んでる暇なし 井上吉郎

井上さんは、生協運動で障害者に出会い、障害者運動に関わり、障害者のための政治づくりに奮闘してこられました。60歳で受傷。その後の生き様を熱く語ります。

3 クロスインタビュー 井上吉郎 × 松本誠司

松本さんと井上さんが、おたがいにインタビュー。知り合って20年以上のお二人ですが、「へーうだったんだ」の新発見もいっぱい。相手の答えから自分を見つめる機会にもなりました。理解が深まった二人の時間をみなさんにお届けします。

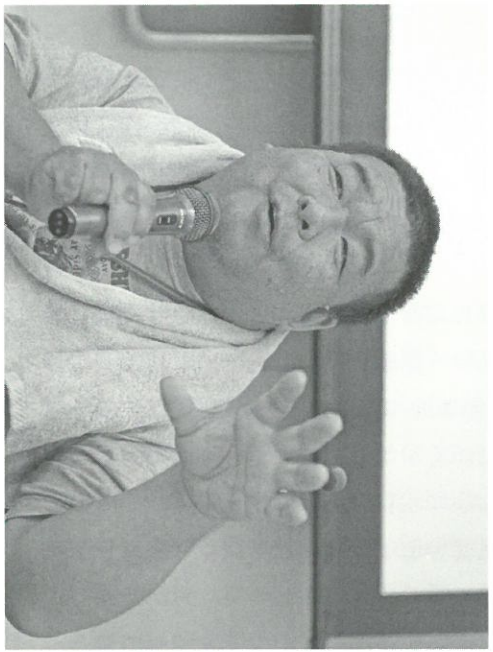
4 「障害」と「差別」と「迷惑」をどう考える 木全和巳

社会福祉と権利擁護が専門の木全さんが、二人の手記とインタビューをもとに、「障害」、「差別」、「迷惑」について考えます。

どのページからでも読めますが、順番どおり、「手記」↓「インタビュー」↓「まとめ」と読みすすみ、執筆者とともに本書のテーマについて考えていただければ幸いです。

夢の中で 走っています！

松本誠司
まつもとせいし



1 「おかあちゃんと帰りたいたい」

僕は、1968年3月に高知県の室戸市で生まれました。当時僕が生まれた病院では、「仮死状態」で生まれた子どもが、僕の他にもう一人保育器に入れられていたと聞いています。

当時僕の家族は、父と姉と長兄は大阪に出稼ぎに行っていました。母も土木作業に従事していたので、僕は祖父母に育てられました。いわゆる「おばあちゃん子」だったので。祖母や母は歩けないことを心配しつつも「普通にしゃべりゆうき、そのうち歩きだすろう」と思っていたそうです。そして、3歳児健診で「脳性マヒ」と診断されました。

その後、保育園に通うこともなく高知市にある肢体不自由児施設・子鹿園に「母子入園」しました。3ヶ月間治療や訓練の仕方（当時はリハビリのことを訓練と呼びました）を母親が学び、自宅で訓練ができるようにすることが目的でした。初めての「母子入園」から帰宅したとき、父が砂浜から砂を取ってきて訓練で使う砂袋を作ったり、訓練で使う玉さしというおもちゃを買ってくれました。

僕は、幼いながらも、これで自宅で家族と暮らしながら訓練をしたら歩けるようになると思っていました。しかし、「母子入園」を数回繰り返した後、5歳のときから子鹿園での一人暮らしが始まりました。



0歳 母に抱かれて

最初にいた病棟は「重度病棟」といわれるところで、ワンフロアに20名ほどの子どもたちが生活をしていました。そこには僕のように伝い歩きができる子から、「寝たきり」の子どもまでいました。でも、このころの僕には、障害という認識はありませんでした。

まだ5歳になったばかりの僕にとって、母や家族と離れて暮らすことは、とても寂しく悲しいことでした。母から電話がくるたびに「菌みがき粉がなくなった」「ミニカーが使用所に落ちた」などその日の出来事を話しました。「買って持って来てほしい」「おかあちゃんに会いたい」という思いでいっぱいでした。

毎週日曜日に母親が面会に来てくれました。お昼ごはんを施設の近くの公園や食堂で食べたり、繁華街にあるデパートに遊びに連れて行ってくれました。それは、訓練訓練の毎日のなかで、楽しい楽しい日曜日でした。楽しいことは続きません。夕方になると母は家へ帰ります。

窓越しに「さよなら」「また、今度の日曜に来るきに」と言葉を変わして別れるのですが、親子ともども涙を流していました。「おかあちゃんと一緒に帰りたいたい」と涙声で言っても母は連れて帰ってはくれません。

「なぜ、僕だけがここ（施設）にいななければならないのか」という悔しさもありました。一人暮らしを始めたころ、祖母や祖父との会話を思い出して、「雨が降りだしたときに、田を見に行かんといかん」とか、すり傷ができたときは「鮎のハラワタを塗って」と看護婦さんに言っていたので、ついたあだ名が「おじい」でした。



2歳 カタカタ

